

私は4月の後半に伊賀内科で実習をさせて頂きました。ハードでしたが本当に充実した、考えさせられる2週間となりました。

協力して下さった患者さん、伊賀先生をはじめ、お世話になった皆さまに心より感謝申し上げます。伊賀先生からのお電話で、教育のためにご来院して下さった患者さんもいらっしゃいました（患者さんに学生さんが来てくれる？と伊賀からお願いの電話をしたということ）。本当に、本当にありがとうございました！

今回多くの収穫がありましたが、特に感動したことをいくつか挙げたいと思います。

#### ・患者さんとの関係　　－死生観・家族単位での付き合い－

まず驚いた事は、どのように死にたいかについて何気なく話ができる関係が構築されていることです。どう死ぬかは人生の満足感と直結する問題です。実際にご高齢で重症肺炎、即入院となった患者さんにお会いして、普段から話し合っていたことの重要性を強く認識できました。

また、家族関係から嗜好まであらゆる情報を把握し、医師として客観的な立場で介入することも非常に大切だと感じました。運動・食事・タバコなどの生活習慣から夫婦仲・介護疲れなど精神的な面まで、人間の生活と疾患が密接に関係していることを再認識させられます。医学的なことも含め、これらの細かい情報は電子カルテに保存されています。情報をいつでも引き出せる形で保存できる電子カルテの役割の大きさにも驚きました。

#### ・診療所の役割　　－患者さんの一番の味方・安心させる医療－

このように医師患者間に深いつながりがあるからこそ、伊賀内科は患者の一番の心強い味方であると感じました。例えば手術をするのかという決断には医学的な適応はもちろん必要ですが、それ以上に患者さん自身の考え方や周りの状況（家族の介護で入院はできない代わりに急死は受け入れるなど）が大きく影響します。両方を把握している医者は本当に頼りになります。

また心配を抱えた患者さんに対して、重大な疾患でないことの説明をするだけで症状が良くなる場合も多く、安心させる医療を実感することができました。例えば木村拓也コーチの訃報の後、クモ膜下出血を心配して来院される患者さんがいらっしゃいました。CTの必要性がとても低いことを丁寧に説明され患者さんの表情が晴れていく様子は、診療所の存在意義を強く感じる瞬間でもありました。

・聞こえる！ —正常心音を理解すること、なぜ出来ないか—

聴診で聞ける音が日増しに増え、本当にうれしかったです。はじめはあまりにも分からず不安でいっぱいでしたが、患者さんの心音を聞きながら正常心音をイメージできるようになってから、急に音が聞こえ出しました。また所見の述べ方を徹底して教えて頂いたことも非常に有効でした。漫然と聞くのではなく、例えば「I音の終わりに注目して」など、意識をある一部分だけにフォーカスさせ何度か聞くと、その部分については確信を持って所見を述べることができるようになり、時間はとともかかりますがこの作業を繰り返します。症例提示にしても物事にはルールがありますが、その大切さを実感できました。その上で、分からなかったり間違えたりした場合は、理由を徹底して毎回分析させられたことも上達につながりました。

・目標設定と自己評価 —モチベーション源になる—

兵庫医科大学の講義に参加させて頂き、このステップを踏むことによってその後のモチベーションが大きく変わると実感しました。一方で、やはり難しいとも感じました。私が伊賀内科で実習を行うにあたって立てた目標は少しピントがはずれていました。妥当な目標設定にはある程度の事前の理解や想像力が要求され、客観的な自己評価には冷静な分析力が必要です。今後は先生や先輩からのアドバイスも参考に、意識して練習しようと思います。

・文章化することの大切さ —頭の整理・読み返せる・客観的な視点—

この実習で一番しんどかったことは日々の感想文の提出です。文章を作る前の段階で頭を整理する作業にとっても時間がかかりました。しかし実習を振り返る時間を毎日持てたことは本当に良かったです。以前の目標や感想を読み返すとその時どう考えていたのかが鮮明に浮かびます。日々の感想文の段階では頭を整理して文章をひねり出すのが苦しかったのですが、最後のサマリーでは伝えたいことが溢れ出し、まとめる事に苦心しました。HPは不特定多数の方が読まれるので対象がイメージしづらく、客観的な立場で推敲する作業も難しかったです。

これからも習慣になるまで目標と評価を頑張っ文章に残し、出来れば他人に読んで頂こうと思います。

・答えは選択肢からは選べない —プロになろう—

診断のプロセスにおいて、国家試験のように解答を選択肢から見つける考えでは全く通用しないことを痛感しました。「どの疾患の検査前確率が高いか」「期

待する所見は何か」「なぜその検査が必要か」「それでどこまで分かるか」「陰性もしくは陽性だったら何が言えるか」伊賀先生の質問は必ず根拠が必要です。正解を選びにくいとする薄っぺらい自分が情けなくなりました。

同時にプロ意識なんて全く持っていなかった自分にも気付かされました。伊賀先生の「プロとして」という言葉、そして誇りを持って日々勉強されている姿、がとても印象的でした。

#### ・医療を取り巻く環境 ー 検診の会議・介護認定ー

今回、学校検診や検診の会議に参加させて頂きました。流れ作業のようにも見える短時間の学校検診で、どの疾患をどれぐらい見つけるために行っているのか、その方法は妥当であるか、など目的や意義を私は考えたことはありませんでした。意識しないと、無駄なことが慣習によって何となく行われてしまう危険性を感じました。

介護認定にも参加させて頂きましたが老々介護など、介護を取り巻く厳しい現状を知り沈んだ気持ちになりました。一方で死生観をもっと積極的に考える必要性も感じました。

#### 最後に

この実習をひとことで言うと「**CBR** 循環器診療スキルアップ」という先生の著書を体感する実習、であったと感じます。症例から根底に流れている伊賀先生の哲学まで以前よりずっと理解できるようになったと思います。物事を深く考えるきっかけを頂いたこと、幸せに思います。

本当にありがとうございました。

#### 私から

聴診能力の向上には驚きました。この調子で疾患の患者さんをみる事ができれば、相当のレベルになるのではと思います。あすからの他の病院実習で自分が取得したことを使い研修医や同僚と議論してください。ますます診断技術が向上するのを実感すると思います。